

文章題テスト・小説(4)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

夏の太陽が、いくらか西にかたむきかけていた。

ハカセたちは、舟坂山の頂上にいた。

「ハカセちゃん、ここまで来ても、いないってことは、ハチベエちゃんはこっちには来なかったんじゃないのかなあ。」

木の下に足を投げ出したモーちゃんが、太った体ではあはあ息をつきながらハカセに言った。ハカセもめがねをはずして顔の汗をぬぐっている。

「そうだねえ。ハチベエくん、いったいどこに行っちゃったのかな。」

「もしかしたら、今ごろ貝塚のところにもどってるかもしれないなあ。」

「そんならいいけど、ひよっとしたら……。」

「ひよっとしたら……?」

ハカセはめがねをかけなおすと、両手を口に当てて、大声でどなる。

「ハチベークーン。」

ハカセのかん高い声が、山々にこだました。辺りは静かだった。

「モーちゃん、城跡にもどろう。」

ハカセが、モーちゃんをふりかえった。

「それで、もしハチベエくんがもどっていなかったら、そうなんは決定的だな。」

ハカセのきん張した顔つきを見たたん、モーちゃんも急に体をひきしめて立ち上がった。

同じころ、ハチベエは、まだ暗い洞窟の中にいた。

暗やみというものが、こんなにこわいものだとは、ハチベエは知らなかった。

いま、自分がどこにいるのか。いったいどれくらいの距離を歩いたのか。そればかりか、時間の感覚さえ失ってしまった。

ひよっとしたら、もう真夜中になっているのじゃないだろうか。



ハチベエは、のろのろ歩き続けながら、そんなことを考えていた。

もう、何度も足をとられてころんだ。そのたびに手や足のどこかをすりむいた。しかし痛いとは思わなかった。痛いかわりに、くたくたにつかれていた。足も体も、棒ぼうのように固かたくなって、関節がみしみし音をたてそうな気がする。

でも、休む気にはなれなかった。ちよつとでも立ち止まったが最後、体がしびれて動かなくなるような、そんな不安が、ハチベエを歩かせているのだ。

ふと、ハチベエは手に触れる壁の手ざわりがちがうのに気づいた。さっきまでの湿しめったやわらかい土の感かん触しよくから、固かたくてざらざらした手ざわりに変わっている。そういえば足元の地面も、さっきまでとまるでちがう。コンクリートのような、しっかりした床ゆかにかわっているのだ。

ふいにてのひらが壁の角に触れた。どうやらトンネルが、右に曲がっているらしい。こんなことは、今まで一度もなかった。ハチベエは用心深く壁にそって足をすすめる。

と、はるか目の先に光の線が何本も見えた。ハチベエは目をこすった。

まちがいなく、それは白い光のすじだった。光のすじのある辺り、薄うすぼんやりと洞窟の内部が見える。

「出口だ！」

ハチベエは、思わず壁から手を放すと最後の力をふりしぼって光のすじめがけて走った。

(那須正幹「それいけズッコケ三人組」より)

1 この文章を、大きく二つの場面に分けるとき、二つめの場面はどこから始まりますか。二つめの場面の初めの五字を書きぬきなさい。「、」「や」。「も」一字とします。

同じころ、

山の頂上の「ハカセ」と「モーちゃん」の会話の場面から、洞窟の中の「ハチベエ」の場面へと変わっている。



2 線1「ひよっとしたら……」とありますが、ひよっとしたらどうだと考えているのですか。次の文の に当てはまる言葉を、文中から四字で書きぬきなさい。

「ひよっとしたら

そうなん

したのかもしれない。」

7行後のハカセの言葉から、二人がハチベエの「そうなん」を考えていることがわかる。

3 線2「痛いとは思わなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア 足がぐたくたにつかれて、しびれてしまっていたから。

イ 暗やみのこわさで、痛みを感じるどころではなかったから。

ウ 全身のつかれと不安が、痛みよりもずっと大きかったから。

エ すでに何度もころんでいたので、なれてしまっていたから。

前後の文章をよく読んで、ハチベエの気持ちを想像してみよう。出口がわからない不安とつかれで、いっぱいなのである。

4 線3「そんな不安」とは、どのような不安ですか。次の に当てはまるように、文中の言葉を使って、二十字以内で書きなさい。

少しでも

び	立 <small>例</small>
れ	ち
て	止
動	ま
か	れ
な	ば
く	、
な	体
る	が
	し

20 10

という不安。

直前部分の内容を、字数に合わせてまとめて書こう。

5 で囲まれた部分で、ハチベエの気持ちと行動はどのように変化しましたか。次のア～エを、時間の流れにそって正しく並べかえなさい。

ア 思いがけない変化に期待がふくらむが、半信半疑ぎでいる

イ 状況じょうきょうの変化をふまえて、慎重しんちょうに行動する

ウ 期待が確信にかわり、夢中で行動する

エ 状況がいくつか変化していることに気づく



エ「壁の手ざわり…足元の地面も…ちがう」↓ イ「壁の角…トンネルが、右に曲がっているらしい」
 「用心深く…すすめる」↓ ア「光の線が…目をこすった」↓ ウ「まちがいなく…」「出口だ!」「思
 わず…走った」と対応する。

